

土づくりをしましょう

野菜畑は良く肥えた土が良いといわれるが、良い土とは何でしょうか。

- ・通気性や排水性が適正で、根が十分に伸びられるような軟らかい状態
- ・保水力や保肥力を持っていること(土の粒子がくっつきあった団粒構造の土壌は、空気も十分とおり、水分保持にも優れています)
- ・適正な酸度、肥料分を持っていることなどが良い土の条件です。

具体的な土づくり

1. 畑をきれいに～耕耘して土を軟らかく

土づくりの第一歩は、畑の清掃からはじめます。雑草が生えていればまず除草します。病原菌や害虫のすみかになったり、肥料分を奪ったりします。特に植物がなくなった畑は厳寒期に大きく掘り起こして天地返しをします。この作業は「寒ざらし」ともいいますが、土中に隠れていた内部の土を冷気と日光にさらすことによって、土中に隠れている害虫の卵や幼虫、病気のもととなる雑菌を減らすことです。また、固まった土をほぐして土質を改善する効果もあります。

2. 堆肥など有機物の施用

化学肥料ばかりで栽培を続けると土壌の有機物が減少していき、固く締まりやすくなります。堆肥の効果は施用直後から急に現れるものではなく、累積的效果が大きいので毎作施用し続けることが望ましいです。

冬には畑があくことが多いので、春の植え付けに向けて早めに土壌へすきこみ土とよくなじませておくと良いでしょう。

<施用の目的>

- ・有機物中の肥料成分を作物が利用する
- ・土壌微生物の活性化と種類の増加など土壌の団粒化や病原菌の密度低下を促す
- ・土壌とよく混和することで、土壌の通気性や保水性がよくなる
- ・土壌の腐植が増加し、保肥力が向上し、肥料の流亡を防ぐ

<堆肥・有機物の種類>

稲ワラ、落ち葉などを発酵させた植物質堆肥と牛や豚、鶏などの糞を主体に発酵させた家畜糞堆肥とに大きく分かります。一般に使用される有機物の成分量の目安は下記のとおりです。

有機物10kg当たり成分量の目安

種 類	窒素 (g)	リン酸 (g)	カリ (g)
稲 わ ら	63	11	85
レ ン ゲ	48	9	37
粃 が ら	60	20	50
米 む か	140～290	300～550	100
ナ タ ネ 油 粕	510	228	170
草 木 灰	—	170	530
木 灰	—	230	780
鶏 ふ ん (乾 物)	305	512	244
干 魚 肥 料 粉 末	880	478	—
骨 粉 (蒸 製)	410	2,230	—
バーク (樹皮) 堆肥	800	600	310
牛ふんオガクズ堆肥(1:1)	64	62	64
牛ふんモミガラ堆肥(1:1)	79	119	42
鶏ふんオガクズ堆肥(生7:3)	132	310	154

<施用方法>

堆肥は一度に多量な施用を行うと土壌の肥料バランスをくずすこともあるので、植物質のものであれば1aあたり300kg程度、牛糞堆肥で200kg程度、豚糞堆肥で100kg、鶏糞堆肥で50kg程度に抑えます。家畜糞堆肥を多量に施用した場合は、その後入れる化学肥料は控えめにしましょう。

使用する堆肥は、いずれの種類でも分解がすすんで黒っぽくぼろぼろした感じになり、適度の水分を含むものとします。分解が進んでない場合は、再度積んで腐熟させてから使用します。種まきの3週間前に施せば、土壌中で有機物の急速な分解が進んでも野菜へのガス障害を防ぐことができます。

3. 土壌酸度の改良

雨が降ると石灰などが流され土壌は酸性に傾いていきます。野菜はだいたい微酸性(pH6前後)で良く育つといわれています。酸度矯正は、作付けする作物や土壌の酸度によって異なります。酸性に弱いものにはホウレンソウ、タマネギ、トウガラシ、アスパラ、ゴボウ、メロン、セルリー、レタス、エンドウ、キャベツ、ブロッコリー、トマト、ナス、キュウリなどで、やや強いものにはサツマイモ、サトイモ、ダイコン、トウモロコシ、最も強いジャガイモ、イチゴなどがあります。酸度を測定するのが望ましいが、野菜を従来作付けしている場所では1aあたり10～15kg程度の施用が目安です。

[\(戻る\)](#)